

研究主題「情緒豊かな子供を育てる『書くこと』の指導の工夫

—自分の『ものの見方・感じ方』をつくる『課題設定や取材』の活動を通して—

東京都教職員研修センター研修部教育開発課

世田谷区立松丘小学校 主任教諭 市川直子

I 研究のねらい

中央教育審議会教育課程部会（平成 18 年 2 月）では、教育内容の改善の六つの観点の一つ「豊かな人間性と感性の育成」を受けて「感性に基づいて情報を処理する力」の育成が示された。

また、言語力育成協力者会議（第 8 回）（平成 19 年 8 月 16 日）では、「考えさせる指導、書かせる指導がより一層必要であること」に加え、「情緒を育てる場合において、論理と情緒とを対立する問題としてとらえることは適当でない。物事を直感的にとらえるだけでなく、分析的にとらえることも情緒を豊かにすることにつながるからである。」と育成方策が述べられた。

しかし、平成 20 年の中央教育審議会答申には、「自分や他者の感情や思いを表現したり、受け止めたりする語彙や表現力が乏しい」子供の現状が指摘されている。

そこで、本研究では、小学校学習指導要領解説国語編（平成 20 年 8 月）で「書くこと」の領域に新設された「課題設定や取材」の学習過程に着目し、児童が経験やそこでの自分の思いを見つめ、考える活動に焦点を当てる。記述を始める前に、自分の経験や思いを分析的にとらえる指導を行うことで、児童は自己と書く対象や事柄を関係付けたり価値付けたりすることができるのではないか。そうすることで、作品は児童の思いが豊かに表現されたものになり、感じる力の育成や情緒豊かな子供の育成につながるだろうと考え、単元や手だての開発を行う。

II 研究の内容と方法

研究仮説 「課題設定や取材」の活動において、書く対象や事柄を自己と関係付けたり価値付けたりして自分の「ものの見方・感じ方」をつくる指導をすることで、作品は児童の思いが豊かに表現されたものになり、情緒豊かな子供になるであろう。		
基礎研究 (1) 「ものの見方・感じ方」のとらえ方と情緒豊かな子供との関連 (2) 学習過程「課題設定や取材」における「ものの見方・感じ方」のとらえ方	調査研究 区内抽出 8 校の教員を対象にした「書くこと」における指導についての意識調査	開発研究 (1) 学習過程「課題設定や取材」における「ものの見方・感じ方」の系統表の作成 (2) 学習過程「課題設定や取材」における自分の「ものの見方・感じ方」をつくる手だての開発 (3) 情緒豊かな子供を育てる「書くこと」の単元の開発

III 研究の結果と考察

1 基礎研究

(1) 「ものの見方・感じ方」のとらえ方と情緒豊かな子供との関連

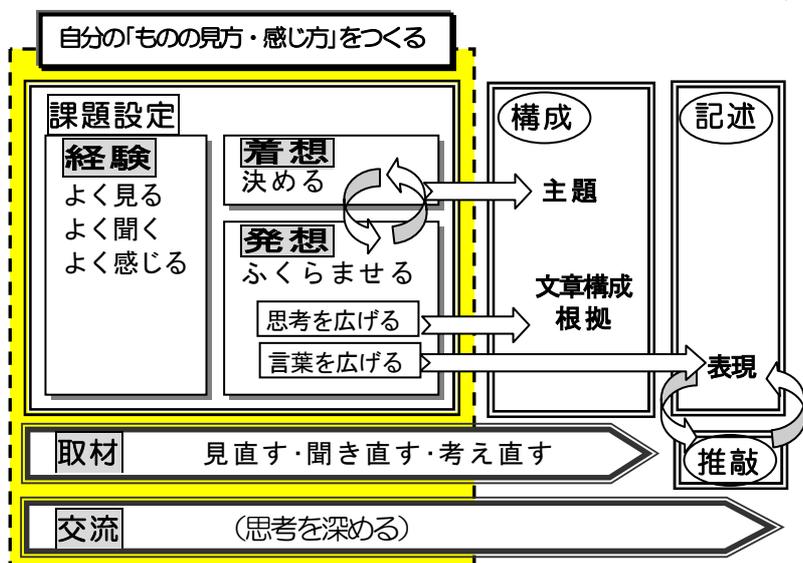
文献や先行研究を基に、「『ものの見方・感じ方』がつくられる」とは、身近なものや事柄と自己とを関係付けたり価値付けたりして考えることと本研究ではとらえる。また、この思考活動を観点をもって分析的に行うことで、「ものの見方・感じ方」が深まると考える。

書く活動では、体験を通じた自分の気持ちや行為を見つめ、振り返る作業を繰り返すことで自分の「ものの見方・感じ方」がつくられ、個性豊かな作品を生み出すことになる。それは、表現する喜びや達成感を味わうことができ、進んで表現する子供を育てることにもなる。

また、日常生活では、自分の「ものの見方・感じ方」がつくられることで、自分の気持ちに加え、相手の気持ちも考え、理解できるようになる。それは、他者とコミュニケーションをとりながら、自分らしく豊かに表現できることにつながる。こうした姿が、「書くこと」の学習で目指す情緒豊かな子供の姿であり、日常生活における情緒豊かな子供の姿であると考え。

(2) 学習過程「課題設定や取材」における「ものの見方・感じ方」のとらえ方

文献や先行研究、小学校学習指導要領解説国語編(平成20年8月)を基に、学習過程「課題設定や取材」を「経験」「発想」「着想」と細分化してとらえ、書く活動における「ものの見方・感じ方」をつくる活動やその位置付けを明らかにした(図1)。



よく見る・よく聞く・よく感じる
経験から、自分を見つめ振り返り、思考や言葉を広げる活動を**発想**とする。その中で、自分とのかかわりを決定する活動が**着想**である。そして、これらの活動で常に行われるのが見直す・聞き直す・考え直す**取材**と、思考を深める**交流**である。こうした「課題設定や取材」の活動を自分の「ものの見方・感じ方」をつくる活動とする。
発想で広げた思考は、**構成**の段階で文章構成や根拠につながり、**着想**で決定した自己との関係付けは、主題につながる。また、**発想**で広げた言葉は、それらを**記述**する段階で、表現となって現れる。こうした一連の単元の学習活動が、個性豊かな作品を生み出すことになると考える。

図1 「書くこと」の単元における「ものの見方・感じ方」の位置付け

2 調査研究

教員を対象にした意識調査から、構成と記述の学習過程では力を入れて指導している(構成: 49%、記述: 54%)が、課題設定と取材では、十分に指導が工夫されていないことが明らかになった。(課題設定: 30%、取材: 22%) また、児童の作品(作文)に関して61%の教員が、表現の工夫が達成できていないと感じていることが分かった。記述する前の学習過程「課題設定や主題」での指導では、思考やそれを表現する言葉を広げることが大切であると考えられる。

3 開発研究

(1) 学習過程「課題設定や取材」における「ものの見方・感じ方」の系統表の作成

児童が自己との関係付けや価値付けをする思考活動を分析的に行うために「ものの見方・感じ方」の観点(表1)を設けて、基礎研究(図1)の「経験」「発想」「着想」「取材」の各活動での指導事項を見直し、児童の姿を明らかにした。

表1 「ものの見方・感じ方」の観点

	課題設定			取材
	経験	発想	着想	
ものの見方・感じ方の観点	目的意識 問題意識 価値意識	比較 時間 空間 論理 類別 置換	関係	確認 評価

(2) 学習過程「課題設定や取材」における「ものの見方・感じ方」をつくる手だての開発

基礎研究、調査研究の結果を受け、学習過程「課題設定や取材」における「ものの見方・感じ方」をつくる手だてとして、以下の3点を開発した。

手だて1	題材の工夫	手だて2	発想メモの工夫	手だて3	交流活動の工夫
	目的意識・問題意識・価値意識をもてるような題材と、それを基にした「経験」の場の設定		思考を広げたり、言葉を広げたりするための付せんや辞書の活用		思考を深めるための各学習過程における交流活動の場の設定

(3) 情緒豊かな子供を育てる「書くこと」の領域の単元の開発

学習過程「課題設定や取材」において自分の「ものの見方・感じ方」をつくる単元を低学年(第2学年)・中学年(第4学年)・高学年(第6学年)それぞれ開発し、検証授業を行った。

【第2学年 単元「次はどうなるのかな—よく見て・よく感じて・順序よく書こう—」の実際】

教師の手品を題材に、伝えたいことを明確にし、順序を整理して書く単元を開発した。

単元の目標 ○手品に関心を持ち、進んで自分の発見や気持ちを表現しようとする。 ○自分の伝えたいことを明確にしなが、順序を整理し、つながりのある文や文章を書く。 ○言葉には、見た事実を表す働きと、心の動きを伝える働きがあることを理解する。	
学習活動と評価 第1時 経験 発想 取材 交流 「次はどうなるのかよく見て、よく感じてメモしよう」 ・教師の手品を観察し、気が付いたことや思ったことを発想メモ（付せん）にメモする。 ・発想メモを「見たこと」と「感じたこと」に分ける。	「ものの見方・感じ方」の観点を基にした 自分の「ものの見方・感じ方」をつくる児童の姿と手だて 経験 【問題意識】 「次はどうなるのかな」と考えながら、教師の手品を観察する。 発想 【時間（展開・変化）】【比較】 手品の展開や変化、それに伴う気持ちの変化に着目して考える。友達の表現や、前後の気持ちの内容と比較して表現する言葉を増やす。 着想 取材 【関係（関係付け）】【確認・評価】 自分の気持ちの変化を確認し、「見たこと」との関係や順序を整理する。
評価 ・手品の順序に従って、自分が感じたことを整理している。	手だて1 教師が行う手品を題材とし、「次はどうなるのかな」と考えながら手品を観察する「経験」の場を設定する。「経験」しながら「取材」となる発想メモを作成することで、その時の自分の気持ちを鮮明に記録できるようにする。さらに、手品の手順に合わせて3つの工程に区切り、「経験」と「取材」をする時間を保障することで、手品に対する自分の気持ちや発見を関係付けることができるようにする。
第2時 着想 交流 構成 記述 「よく見て、よく感じたことを、順序よく書こう」 ・発想メモから「次はどうなるのか」と考えた自分の気持ちの変化を確認する。 ・気持ちの変化にかかわる「見たこと」を、気持ちと合わせて構成メモに整理する。 ・構成メモを基に記述する。	手だて2 手品の工程に合わせて3色の付せんを用意する。「取材」では、「見たこと」「感じたこと」を発想メモに記述し、手品の順序に合わせて自分の発見や気持ちの変化を確認できるようにする。また、発想メモを構成メモに生かすことで、自分の「ものの見方・感じ方」がつけられる様子が、目に見えるようにする。 手だて3 「発想」での交流では、「見たこと」「感じたこと」の順序を確認し、友達と比較することで表現する言葉を増やせるようにする。
評価 ・自分の伝えたい気持ちを確かめながら、順序に沿ったつながりのある文や文章を書いている。	
第3時 推敲 交流 「友達の作品を読み、感想を伝えよう」 ・友達に読んでもらう前に、自分の作品を読み直す。 ・互いの作品を読み合い、感想を伝え合う。	
評価 ・友達の作品を読み、よいところを見つけ、伝えている。	

児童Aの本単元での作品（作文）

ぼくは、先生にてじなを見せてもらいました。まず、先生のポケットから赤いひもがでてきました。そして赤いひもをくるくるとまわしていました。どうしてかはわからないけど五かいぐらいまわしていました。そのあとに、ひもをくしゃくしゃにまるめて手のひらにいきをかけていました。まほうをかけるのかなと思いました。つぎにたぶん赤いひもから白いひもへとかわるのではないかと思いました。さいごにいっしゅんでスワットと赤いひもから白いひもに変わったのでびっくりしました。またにかんがえていたことがあったのでうれしかったです。ぼくは、てじなはおもしろいものだなと思いました。またてじなを見てみたいです。

児童Aの1学期の作品

（運動会の作文）

『うんどう会』
 ぼくは、今日うんどう会でしました。まず大玉ころがしをしました。つぎにダンスをしました。さいごにかけっこをしました。大玉ころがしは、力いっぱいがんばりました。ダンスはリズムにのってたのしくおどりました。かけっこはがんばってはりました。今日はたのしい一日でした。

児童Aは、「取材」の中で16枚の「感じたこと」の発想メモを作成した。「発想」「着想」を繰り返しながら構成メモを作成する時に「どうしてかはわからない」「赤いひもから白いひもへとかわる」「かんがえていたことがあったのでうれしかった」と自分の気持ちの変化を確認した。また、それを基に、手品は面白い、また見たいと自分の考えを作品にまとめた。

さらに、記述では、「赤い」「くるくると」「五かいぐらい」と発想メモの内容に詳しく説明する語句を追加して記述したり、「何かかわるのではないか」の発想メモから「まほうをかけるのかな」と表現を工夫したりして様子や気持ちを表現した。

児童Aの振り返りカード

第一時の学習感想 おもしろくてじなでこんなすごい学しゅうができるのが、すごいと思いました。	単元を終えての学習感想 作文は、じゅんじよよく書くことや、つなぎことばをつかうことでうまく書けることを学びました。	自己評価 できるよくなったこと ものこをよく見てよく感じる。 じゅんじよに気をつけて書くことをせいりする。	つなぎことばをつかって文しようを書く。	じゅんじよに合った文しようになつてくか読みなおす。	友だちの文しようを読んでよいところを見つけ伝える。
◎	◎	◎	◎	◎	◎

(4) 各学年での検証授業の結果と考察

今回の作品と1学期の作品とを「書く対象や事柄と自己を関係付け・価値付けているか」、「表現が工夫され、自分の思いが表現されているか」の観点で比較した(図2)。

第2学年では、1学期の作品は、運動会の練習や本番など書く事柄の様子を記述し、最後に「楽しかった。」「思い出になった。」と気持ちを簡単にまとめてしまう作品が多く見られた。しかし、本単元の作品では、伝えたいことが、「ふしぎ手品」「ひもの色が」「白いリボンが見えた」と題名になって表されたものも目立った。

また、「水がゆれているように先生がまるめました。」「赤いリボンをまるめて、いきをふきかけました。そこで、なくなるのかな、みじかくなるのかな、赤が白になるのかなと思いました。」と様子や気持ちが伝わる表現も見られた。

第4学年や第6学年では、「発想」の活動で辞書を活用することにより、これまで使わなかった言葉を用いたり、一言で済ませていた心情表現がより具体的になったりと、表現の幅が広がる様子が多く見受けられた。

このことから、学習過程「課題設定や取材」において、「経験」を基に「発想」「着想」を繰り返しながら自分の「ものの見方・感じ方」をつくる指導を行うことで、伝えたいことや表現したいことが明確になることが分かった。また、それを表現する言葉も広がり、作品は児童の思いが豊かに表現されたものになることが分かった。手だての有効性は、以下の通りである。

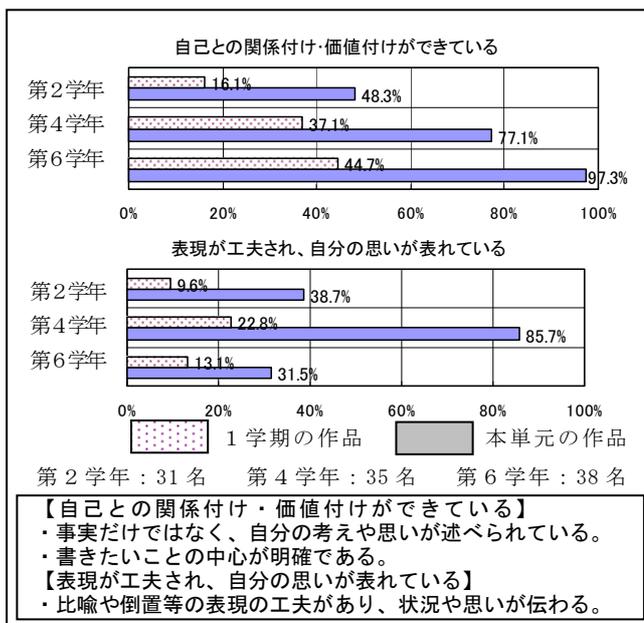


図2 本単元の作品(作文)と1学期の作品(作文)との比較

手だて1	題材の工夫	手だて2	発想メモの工夫	手だて3	交流活動の工夫
	発達段階や単元のねらいに合った題材を提示することで、児童は書く活動への意欲に加え、題材の価値を見いだすことができる。 また、題材の提示の際に、題材を基にした経験の場を設定することで、児童は学習活動への目的意識・問題意識・価値意識をもつことができる。		付せんへの記述は、気楽にメモできるため書く抵抗が少なく、楽しみながら発想を広げ、記述の活動をスムーズにすることができる。また、付せんを構成メモに活用することで、児童は自己との関係付けや価値付けを目に見える形で行うことができる。さらに、言葉を広げることで、児童は意識して表現を工夫することができる。		各学習過程で交流活動を行うことで、児童は思考を深めたり、自己との関係付けや価値付けをより的確に行ったりすることができる。また、学年が上がるに従って、交流活動による思考の深まりを作品へ反映させることができる。発達段階に合わせて交流活動の人数や方法を工夫することで、活動を充実することができる。

また、振り返りの感想からは「自分でもいい作品が書けた。」「気持ちを伝えられてよかった。」と表現したことへの達成感や満足感、「作文を書くのが楽しくなった。」「自分の気持ちや考えをいろいろな表現で伝えたい。」と表現への意欲を高めていることが分かった。日々の生活の中で物事を自己と関係付けたり価値付けたりする姿勢を育てること、また、児童の表現する言葉を広げることが、表現への意欲を更に高め、自分らしい豊かな表現を生み出していくと考える。

IV 今後の課題

- ・ 言葉を広げるために、児童が積極的に辞書を活用し表現に生かす指導の工夫を更に探る。
- ・ 日常生活の中で物事を自己と関係付けたり価値付けたりする姿勢を育てるために、他教科等においても、自分の「ものの見方・感じ方」をつくる力を育てることを考える。